

國外との研究交流

福井文雅

東洋哲學研究室へ海外から留學する學生は、戦前から必ずしも少ないわけではなかったようである。現に洪淳昶先生（昭和十七年卒）が韓國に大先輩として御健在である。

しかし、正確に言えば洪先生は東哲の前身「哲學科（支那哲學專攻）」の御卒業である。東洋哲學研究室が誕生した當初にどのような方が海外から東哲に留學していたかは、私のような戦後育ちは知るところではない。それはいずれ先輩のどなたかが書かれるであろう。ここでは昭和三十年代以降の状況を書いておきたい。何故ならば、留學生それぞれが歸國後研究機關で活躍はしていても、東哲專修に留學していたと言う事實は、研究室に明瞭には記録されていないからである。殆どの事例が本誌發行以前で、記録する場が無かったと言う理由もある。

ところが、東哲研究室への留學生、國外學者との研究交流の歴史は、そろそろ書き残しておかないと、昭和三十年代以降の事でさえも忘れさられてしまう恐れがあるように私は最近感じている。本誌しか記録しておく場は無いので、遅ればせながら彼等の足跡をここに記しておきたい。

しかし、これは私個人の知る範囲であるから洩れが多いことであろう。次號以下で補って戴ければ幸いである。以下、敬稱は原則として省略する。

さて、先ず第一に擧げなければならないのは、南ヴェトナムからの留學生、釋天恩 Thich T'ien An である。昭和三十四年（一九五九）の文研東哲卒。早大文學部の新制文學博士の第1號取得者である。當時の南ヴェトナムはフランス領から獨立したばかりであり、フランス式教育を受けてフランスへ留學するのがエリートの進む道であった。しかし、釋天恩は實父が中年から佛教僧に成った關係から、自分も僧侶と成って修行し、一九五四年にヴェトナム佛教會から派遣されて早稲田大學に學んだのである。因みに、その實父は、ゴ・ジン・ジエム政權に抗議して燒身自殺を遂げたことで有名な僧である。

釋天恩は宮本正尊と福井康順の二指導教授の下、一九六二年に華嚴思想の研究で博士號を得た。ヴェトナムに歸國後は、フエ市の大學の文學部長等に成ったが、間もなく渡米して、徒手空拳でアメリカにオリエント大學とヴェトナム寺を創設して學長と成ったが、一九八〇年に五十六歳で急逝した。私は大學院で同級生であっただけに、思い出話は數限りなくあるが、それは別の機會に改めて述べることにしたい。

林灑聰は昭和四十一年、文研東哲修士卒。栗田直躬教授の下で『荀子』を學び、現在は臺灣大學教授である。

留學生で戦前・戦中と違う大きな點は、歐米から留學する學生が出てきたことである。殊にこの十數年來に著しい。學部にも留學する場合はあるが、大學院以上の例で言えば、アメリカから Stephen Bokenkamp スチーヴン・ボーケンキャンプ（道教研究。現在、アメリカのインディアナ大學教授）、中國から陳少峰（現在、北京大學哲學系講師）がいる。留學生を受け入れる場合には、早大側に「研究協力員」が必要である。上の兩名の場合は楠山春樹教授がその研究協力員に當った。

同様にしてフランスから留學した Frédéric Girard フレデリック・ジラルド（日本佛教）は平川彰教授指導の下で博士論文を完成し、昭和五四年（一九七九）二月十九日に完成祝賀會が新宿「酔心」で開かれた。

早大には、世界諸國の大學と「交換研究員」の協定があり、それに従って來校した學者もいる。例えば、昭和四十二年（一九六七）十月から半年、フランスから Max Kaltenmark マックス・カルタンマルク教授（中國宗教史・道教學）が來校、東哲研究室主催で講演「中國古代宗教思想史序説」や連續講義「中國の宗教——黃庭經ゼミナール」等々をされた。他には、ドイツから Michael Hahn シヒャエル・ハーン（インド・チベット佛教學）、ヘルムート・クラッサー Helmut Krasser（インド學・佛教學）フランスから Jean-Noël ROBERT シャンノエル・ロベール（佛教學、特に日本天台）の各教授がいる。東洋哲學研究室へではなく、早大の他の東洋學關係専攻へ留學または研究、講演等で來校して、當研究室に關係をもつようになった外國人も少なくない。例えば（略ぼ年代順、故人は除く）、臺灣から劉枝萬（中央研究院民俗學研究所、早大校友）、フランスから Jean-Jacques Origas シャンジャック・オリガス（日本文學）、Jacqueline Pigeot シャックリーヌ・ピジヨール女史（日本文學）、Claudine Salmon-Lombard クローディヌ・サルモンロンバル夫人（東南アジア史、フランス極東學院の現院長ドゥニ・ロンバル教授夫人）、François Martin フランソワ・マルタン（中國文學）、Jean-Pierre Diény シャンピエール・ディエニ（中國文學）、オランダからティルマン・フェッター Tillmann Vetter（インド哲學）等々がいる。また、大正大學への留學生でありながら、東哲の授業に熱心に通って來た學生として Terry Kleeman テリー・クリーマン（現在、ペンシルヴァニア大學東洋學部門教授）を忘れるわけにはいかない。氏は臺灣に留學後、日本、フランスにも留學。中國語、日本語に巧みで、中國宗教史の新進研究者として注目されている。

以上の人々の内の佛教學關係者は、多くが三崎良周教授の指導または協力下にあった。

現在大學院に在學中なのは、中國大陸からの閻苗^{ヤウミョウ}（中國哲學）、臺灣からの金碧蘭（中國佛教）、フランスからの Jean-François Soen ジャン・フランソワ・スーム（熊澤蕃山研究）、フランスに長く留學したアメリカの David-Neil SCHMID ディヴィッド・ネイル・シュミッド（中國佛敎文學）がいるが、楠山、三崎兩教授が退任の後にも東哲専攻あてで多くの留學生が託されている。

Florin Delaun フローリン・デレアヌは中國佛敎史、特に禪觀を研究するが、ルーマニアから留學後、昨年日本に歸化した。デレアヌが姓。各國語を驅使した研究には獨特の視點がある。

國外との學術交流と言う點で共通點があるので、ここに研究室關連學生と中國（臺灣）との交流を付記しておかねばならない。これも本研究室の歴史の一齣である。

臺北駐日經濟文化代表處は、日華兩國文の青年學生が相互に交流し、社會文化の理解を深めるようにと、國、公、私立大學で年齢二十七歳以下の學生を「日本大學生代表訪華團」として、毎年約一週間臺灣へ招聘している。この企畫によってこれまでに早稻田大學から訪臺した學生は、殆どがすべて東洋哲學專修の大學院授業に列した學生達である。従って彼等も東哲の歴史の一翼を擔うものと言え、第一回目から平成五年三月までの參加者名を年代順に記録するならば、早田充宏、垣内景子、森由利亞、二階堂善弘、高橋佳典、宮岸雄介、川田健、村松哲文、一條浩司、阿純章であった。